

角ヶ谷城跡2次

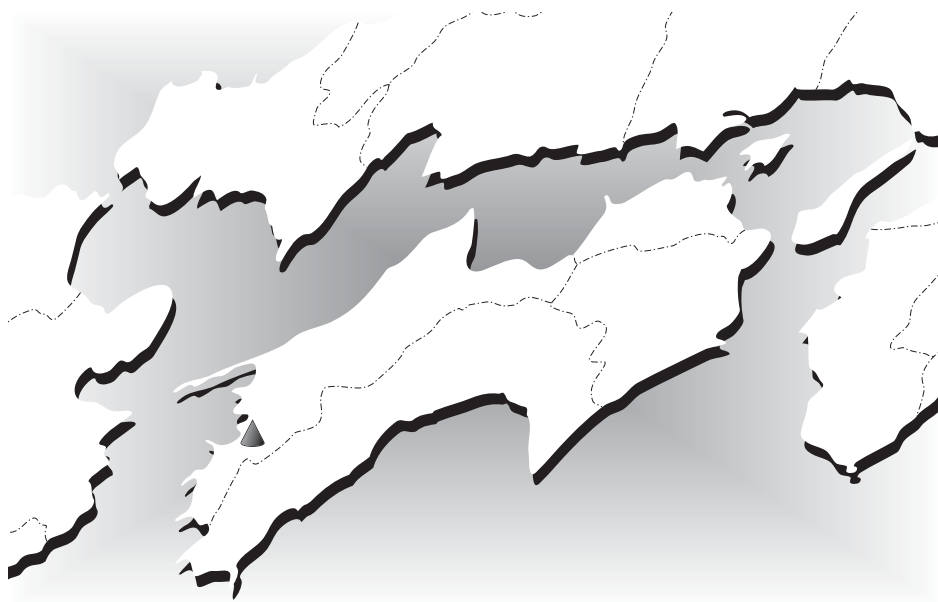
—四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ—

2006.10

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

角ヶ谷城跡 2 次

—四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ—



2006.10

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター



上空から見た三間盆地と角ヶ谷城跡周辺（西より）

例 言

- 1 本報告書は、愛媛県宇和島市三間町に所在する角ヶ谷城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および報告書の作成は、四国横断自動車道の建設に伴い、国土交通省の委託を受け、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成18年7月から平成18年8月の間に実施し、整理作業および報告書の作成は平成18年9月から平成18年10月にかけて実施した。

- 4 発掘調査および整理・報告書の作成は、次の職員が担当した。

眞 鍋 昭 文 郷 田 秀 和

- 5 発掘調査および報告書作成において、下記の職員および作業員の協力を得た。

職 員

中 野 良 一 土井光一郎 保氣口勝之 若 杉 美 香

現場作業員

池 田 正 行 泉 野 悟 泉野哲夫 浦田定義 河田隆文 小林健男 下 村 舞
富 永 重 三 中谷晴幸 樋口昭則 樋口友和 兵 頭 清 福本誠一 松浦恵子
薬 師 寺 充 山 本 龍 見

- 6 発掘調査および報告書作成では、多くの方々や関係機関のご指導・ご助言をいただきました。記して謝意を表します。(50音順・敬称略)

広 瀬 岳 志 日和佐宣正 吉 野 健 志

- 7 本報告書の執筆・編集は眞鍋が行った。

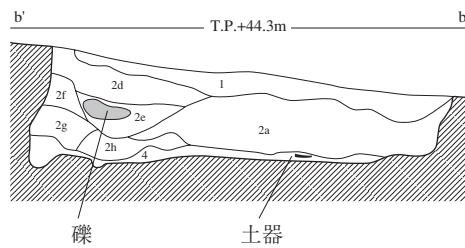
凡 例

一覧表の略記号表記例

遺構の略号	
遺 構 種 別	略 号
溝	SD
柱 穴 ・ 小 穴	SP

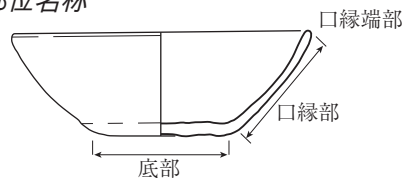
遺物一覧の略記号	
略記号	内 容
L	長 さ
W	幅
H	器高・高 さ
T	厚 さ
R	直 径
MR	最 大 径
HR	孔 径
TR	口 径
NR	頸 部 径
LR	底 径
g	重 量
o	外 面
i	内 面
(cm)	推 定 値
[g]	残 存 値

遺構の表現例



土層断面図中の網伏せは礫、塗りつぶしは土器を示す。

土師器皿杯の部位名称



本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1 確認調査	1
2 調査の経過	1
3 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
1 縄文時代	3
2 弥生時代	4
3 古墳時代	4
4 古代	4
5 中世	4
第3章 調査の概要	7
第1節 地形と調査区	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物の概要	7
第4章 中世の遺構と遺物	11
第1節 第3郭	11
1 掘立柱建物	11
2 溝	11
3 遺物	17
第2節 第4郭	17
第5章 まとめ	19

図 目 次

図1	周辺の遺跡分布	2
図3	調査区の位置	6
図3	遺構配置・基本層序	9
図4	第3郭	12
図5	第4郭	15
図6	城郭施設の配置	18

表 目 次

表1	調査体制	1
表2	主要遺構一覧	8
表3	柱穴一覧	17
表4	掲載遺物一覧	18
表5	出土遺物一覧	18

図 版 目 次

図版1	上:上空から見た角ヶ谷城跡周辺(東より)／下:基本層序(東壁土層堆積状況)
図版2	上:第3郭土層堆積状況(北西より)／下:第3郭(北より)
図版3	上:第3郭(南より)／下左:遺物(1)出土状況／下右:遺物(2)出土状況
図版4	第4郭(北より)
図版5	上:完掘状況(南西より)／下:完掘状況(西より)
図版6	上:第3郭盛土断ち割り断面(北東より)／下:出土遺物(1～3)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

1 確認調査

西日本高速道路株式会社(以下「西高株」)は四国横断自動車道13次区間(三間～西予宇和)建設工事に伴い、宇和島市三間町曾根904・905番地の同予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「角ヶ谷城跡」の一部に含まれている可能性が考えられることから、愛媛県教育委員会(以下「県教委」)とその取扱いについて協議を行い、平成17年12月から平成18年2月にかけて、同予定地の埋蔵文化財の有無等について財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター(以下「県埋文センター」)が試掘調査を実施した。その結果、開発予定地内に城郭に伴うと考えられる遺構が確認された。

2 調査の経過

試掘調査の結果により、工事に先立つ記録保存のための発掘調査が必要となったことから県埋文センターが発掘調査を実施することになった。なお、平成18年度から四国横断自動車道の建設が西高株から国土交通省による新直轄方式となったため、発掘調査は国土交通省四国地方整備局の委託を受けて実施することとなった。

発掘調査は、平成18年6月から調査準備を行い7月10日に着手した。発掘調査は試掘結果を参考に、まず調査区の周囲に人力でトレンチを掘削して土層の堆積状況を確認した。その後、機械力を用いて遺構面の直上まで表土層を除去し、遺構・遺物の検出・掘削を行った。それらの作業と並行して平・断面図の測量及び写真撮影などの観察・記録を実施した。

なお、測量については、基準点(WGS84系測地成果2000)を調査区周辺に打設してこれを用いた。また、遺物の取り上げについては、層位・遺構ごとに取り上げ、必要に応じてドットマップなどを作成し、現地における発掘調査は8月31日に終了した。

発掘調査で得られた資料については、遺構・遺物の図画や写真類を県埋文センターが、出土遺物を県教委がそれぞれ保管・管理している。

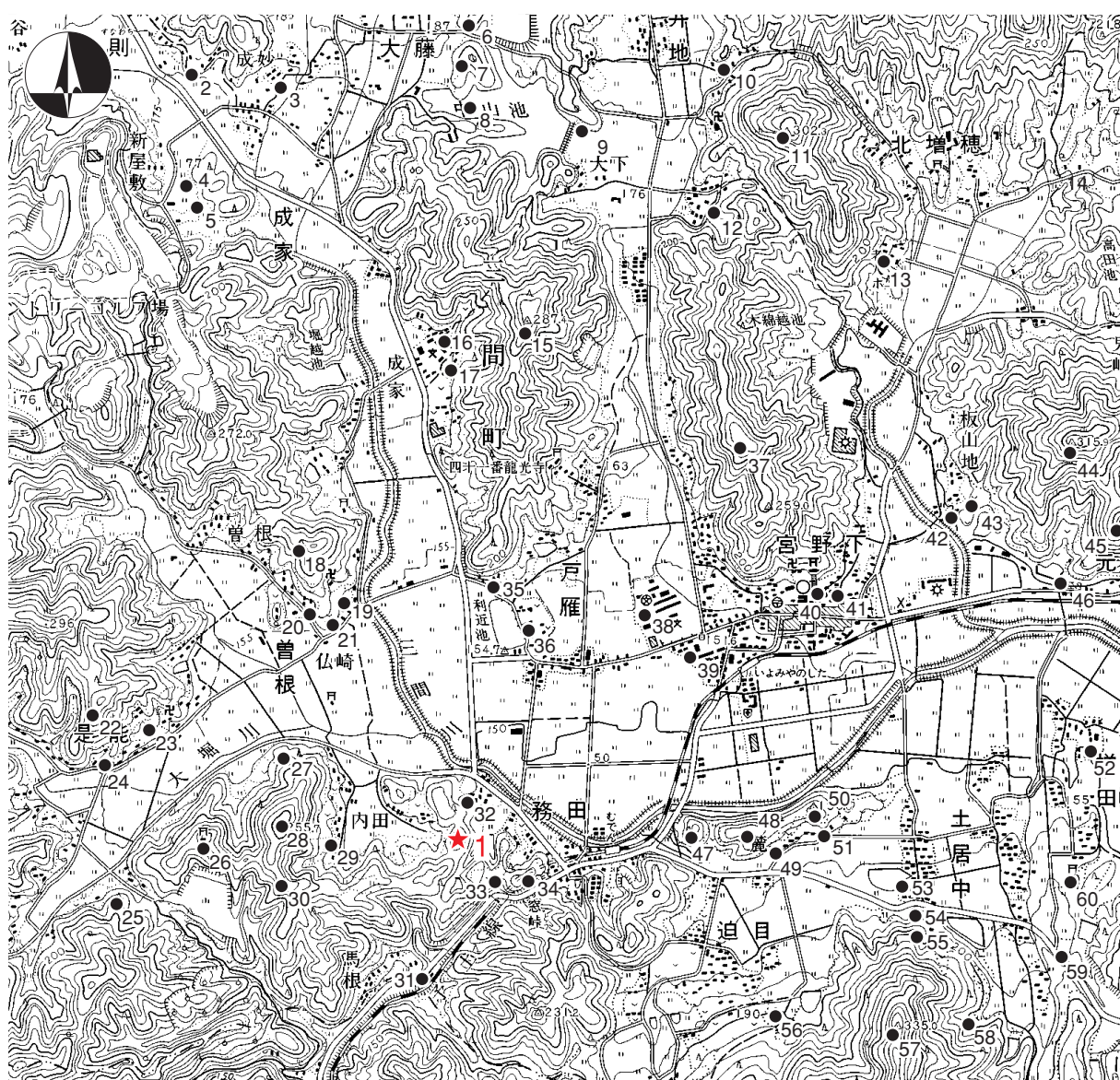
なお、遺構写真はデジタル化して原盤とともに保存している。

3 調査の体制(表1)

発掘調査および報告書作成の調査体制は表1のとおりである。

表1 調査体制

平成18年度			
理事長	野本俊二		
常務理事	日野孝雄		
総務課長	越智英規		
調査課長	岡田敏彦		
調査第二係長	眞鍋昭文		
調査員	郷田秀和		



1	角ヶ谷城跡	21	仏崎遺跡	41	渡辺遺跡
2	正地遺跡	22	沢近城跡	42	板山地遺跡
3	ウワグチ遺跡	23	庄屋遺跡	43	板山地柱穴跡
4	ムカイノオク遺跡	24	春日古墳	44	大森城跡
5	ムカイノオク下遺跡	25	盲谷遺跡	45	松峰城跡
6	御墓遺跡	26	鳥屋が森城跡	46	野添池遺跡
7	トウボク遺跡	27	霊法遺跡	47	西城遺跡
8	中山池遺跡	28	萩森城跡	48	岡本遺跡
9	太宰遺跡	29	内田西遺跡	49	中城遺跡
10	竹中奥遺跡	30	茶臼の森城跡	50	下城遺跡
11	黒井地城跡	31	馬根遺跡	51	赤松遺跡
12	源蔵遺跡	32	務田遺跡	52	松本遺跡
13	西谷遺跡	33	窓峠遺跡	53	東県道下遺跡
14	広がり谷遺跡	34	正徳ヶ森城跡	54	三間焼窯跡
15	金山城跡	35	アンチモニの穴跡	55	土居清良廟
16	朝谷遺跡	36	森山遺跡	56	妙覚寺遺跡
17	成妙小学校南遺跡	37	雨乞城跡	57	新城跡
18	岩倉城跡	38	三間高校校庭遺跡	58	土居中遺跡
19	宗光遺跡	39	宮の下遺跡	59	生島遺跡
20	丸山遺跡	40	三島神社遺跡	60	妙見神社遺跡

図1 周辺の遺跡分布

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

宇和島市三間町は愛媛県西南部に位置し、北部を東西にのびる法華津山脈(標高約500～900m)に、南西部を泉ヶ森・槇ノ山山地(標高約600～700m)などの山地に囲まれている(芳我1974)。四万十川支流の三間川・広見川・吉野川等の小河川によって、低位段丘や低湿地が形成され、この低地は鬼北盆地として地形区分されている。鬼北盆地西部はおもに三間川によって形成された盆地で、鬼北盆地の小区分として三間盆地と呼ばれている。角ヶ谷城跡はこの三間盆地の西端部に位置し、南部に発達した泉ヶ森・槇ノ山山地から延びる小起伏丘陵上(標高約185m)に位置する。

三間盆地は地質学的には四国を横断する仏像構造線南側の四万十帯に属し、四万十帯は下大野層・法華津層・吉田層・小倉層・三間層・光満層・寄松層等から形成される。今回調査を実施した務田・曾根一帯の表層地質は、光満層に属する砂岩層が基盤となっている(三間町誌編纂委員会1994)。また土壌学的には、三間盆地一帯に黄色・灰色系の沖積低地堆積物が発達し、角ヶ谷城跡の丘陵部は和霊統と呼ばれる褐色森林土壌が堆積している(清水・藤本1974)。

第2節 歴史的環境(図1)

宇和島市三間町の埋蔵文化財調査は、1987年から実施された旧三間町による遺跡詳細分布調査を端緒とする。詳細分布調査は3年間に渡って実施され、報告書と町誌にまとめられた(三間町遺跡詳細分布調査団1987ほか、三間町誌編纂委員会1994)。本格的な発掘調査は務田遺跡(32)の調査が初めてで、県埋文センターと三間町教育委員会によって2次に渡って実施され(多田・中島2004、井関・中島2005)、次いで県埋文センターが正徳ヶ森城跡(34)・角ヶ谷城跡(1)において実施している(片岡・藤本2005,2006)。

1 縄文時代

旧石器時代の遺跡は現在のところ未発見である。

縄文時代前半期の遺跡では金銅遺跡・馬根遺跡(31)・中山池遺跡(8)などが挙げられる。金銅遺跡ではチャート製の石鏃が確認されており、石材利用や石鏃の形態から縄文時代早期の所産と位置づけられている(三間町遺跡詳細分布調査団1987)。馬根遺跡では、サヌカイトやチャート製の石鏃・尖頭状石器・石核などが確認され、縄文時代早期にまで遡る可能性がある(三間町遺跡詳細分布調査団1988)。中山池遺跡周辺では、縄文時代前期と考えられる姫島産黒曜石製の石鏃や中期船元式土器などが採集されている(三間町遺跡詳細分布調査団1990a)。

後半期の遺跡では三間高校校庭遺跡(38)が知られている。1987年に旧三間町による踏査で発見された遺跡で、1988年に愛媛大学考古学研究室によって確認調査が行われ、晩期の刻目突帯文土器が出土している(三間町遺跡詳細分布調査団1988)。また、土居中地区で採集された頁岩製のもの

ので独鈷石は、後期から晩期にかけての所産と考えられている。その他にも、宮野下地区の板山地でも石鏃などの採集例が報告されている(三間町遺跡詳細分布調査団1990b)。

2 弥生時代

新田神社裏山や三間小学校付近があげられる。新田神社裏山では壺棺が確認されている(三間町誌編纂委員会1994)。また、三間小学校付近では石庖丁も確認されている(三間町誌編纂委員会1994)。

3 古墳時代

春日古墳(24)・西谷古墳・一ノ森古墳が確認されている。春日古墳は直径約11mの円墳で、埋葬主体として箱式石棺が確認されている(三間町遺跡詳細分布調査団1990b)。西谷古墳は直径9.4mの円墳であるが主体部は未確認である(三間町遺跡詳細分布調査団1990b)。一ノ森古墳では、周辺から円筒埴輪片が採集されていて(三間町遺跡詳細分布調査団1990a)、須恵器の年代観から、7世紀末から8世紀初頭にかけての古墳であると考えられている。墳丘形態は不明である。

4 古代

務田遺跡1次調査において、8世紀の須恵器短頸壺が出土している(多田・中島2004)。

5 中世

宮野下地区の板山地で、柱穴群が確認されている(三間町遺跡詳細分布調査団1988)。また、愛媛大学考古学研究室の調査でも、柱穴7が確認されている(三間町遺跡詳細分布調査団1988)。務田遺跡第1次調査では掘立柱建物2棟、柱穴44が確認され、土師器杯や土師質土器の鉢、土鍋などが出土している(多田・中島2004)。三間町教育委員会が実施した2次調査においても、掘立柱建物が確認された(井関・中島2005)。正徳ヶ森城跡は調査区内では中世城館に係る遺構・遺物の出土がなかったものの、単郭構造の砦や狼煙台としての機能が考えられている(片岡・藤本2005)。また富ヶ谷池では、中に10,211枚の銅銭が納められた備前焼の壺が発見されている(三間町遺跡詳細分布調査団1987・立川1988)。

また、県教委が実施した中世城館跡の分布調査では、新城跡(57)(土居中)、西城跡(47)・中城跡(49)・下城跡(50)・大森城跡(44)・告森城跡・井関城跡・一ノ森城跡・高森城跡・岡本城跡など、多数の中世城館が確認された(愛媛県教育委員会編1987、三間町遺跡詳細分布調査団1988・1990a)。こうした事例以外にも、中野集会所裏・新田神社・中山池で、土師器や羽釜などの中世土器が採集されている(三間町遺跡詳細分布調査団1990a・1990b)。

参考文献

- 芳我幸正1974「I地形分類図」『土地分類基本調査 宇和島』愛媛県
- 清水 敬・藤本義則1974「III土壌図」『土地分類基本調査 宇和島』愛媛県
- 日本の地質『四国地方』編集委員会編1991『日本の地質8 四国地方』
- 愛媛県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会地理部門編1999『鬼北盆地の風土と人々のくらしー三間町・広見町・松野町ー』
- 愛媛県教育委員会編1987『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』
- 三間町遺跡詳細分布調査団1987『三間町成妙地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 三間町遺跡詳細分布調査団1988『三間町三間地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 三間町遺跡詳細分布調査団1990a『三間町二名地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 三間町遺跡詳細分布調査団1990b『三間町詳細分布調査報告書』
- 三間町誌編纂委員会1994『三間町誌』
- 立川増吉1988『伊豫の発掘古銭』
- 多田 仁・中島義人2004『務田遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 井関副子・中島弘二2005『務田遺跡-第2次調査-』三間町教育委員会
- 片岡大介・藤本清志2005『正徳ヶ森城跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 片岡大介・藤本清志2006『角ヶ谷城跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

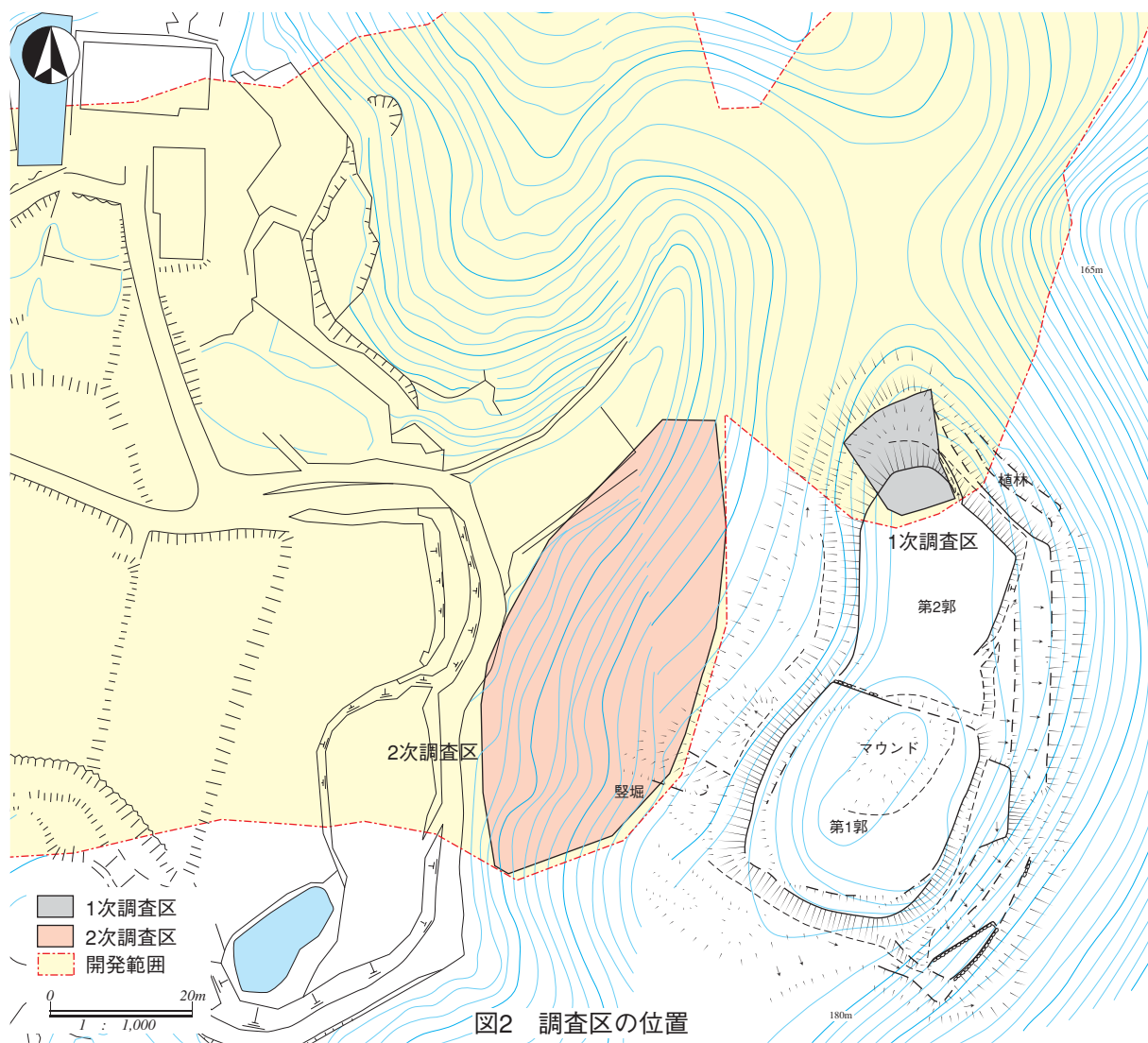
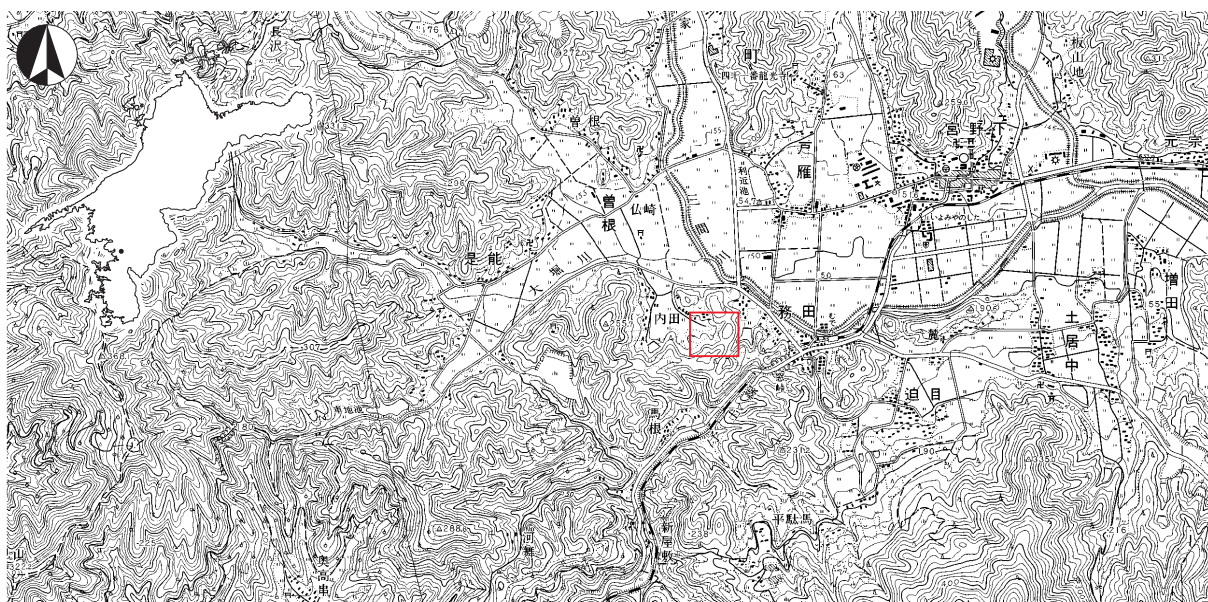


図2 調査区の位置

第3章 調査の概要

第1節 地形と調査区(図2)

調査区の絶対位置は、北緯33°16'49"、東経132°35'50"の交差する付近で、現地表面の標高は160～177m前後である。行政上は宇和島市三間町曾根で、調査前は山林であった。調査区は城郭の中心施設である山頂の郭(第1郭・第2郭)の西側斜面にあたり、第1郭の南西端から西へ延びる堅堀の可能性が考えられる溝状の窪みが調査区内まで確認されている。角ヶ谷城跡の防御施設は城の北と東側でより堅固で、西側は第1郭・第2郭の切岸以外に明確な施設は確認されていない。城の西側には、周囲を山地に囲まれた小盆地状の低地が広がり、低地を挟んで萩森城跡に対峙している。

調査区は南北約67m、東西約35m、投影面積は880m²である。

第2節 基本層序(図3)

I層は未分解の植物遺体を含む腐植土層である。

II層は大きなもので人頭大ほどの角礫を多量に含む砂礫層である。調査区の南東部では厚く堆積するが、北半部および南西部や斜面低位側では認められない。角礫は破碎礫であり、人為的な掘削に伴って生じた土砂と考えられる。

III層は有機質を多量に含んで土壌化したII層堆積以前の旧表土層である。IIIa層とIIIb層に細分できる。IIIb層は漸移層である。

IV層は橙色を呈する締まりのないシルト混じりの細砂層で、いわゆるオンジである。急斜面で岩盤が露出する箇所を除いて調査区のはほぼ全域で確認できる。

V層は谷部にのみ認められる表層風化土である。礫が含まれてやや赤味を帯びるVa層と礫が含まれないVb層とに細分できる。

VI層は光満砂岩の風化岩盤層である。帯状に黒色の頁岩層の貫入が認められる。

第3節 遺構と遺物の概要(図3・表2)

完掘後の地形は、調査区中央と南端部に尾根が張り出し、両尾根に挟まれた部分が細く浅い谷となっている。最高所の標高は175.5mで、山裾の低地との比高17mを測る。傾斜面の最大斜度は約34°、平均斜度は約31°である。

遺構はいずれも谷部で検出された。検出した遺構は郭2面・掘立柱建物1棟・溝2条・柱穴17である。このうち溝SD2と柱穴SP1～5は掘立柱建物を構成するもので、掘立柱建物は第3郭の付帯施設である。なお、郭の名称については縄張り調査で確認された山頂の郭が第1郭・第2郭とされているため、今回検出した2面の郭はそれぞれ第3郭・第4郭と呼称することとした。また、当初

表2 主要遺構一覧

単位:cm (*.):復元値 [*.]:残存値 →**:**を切る,←**:**に切られる

種 別	遺構名	平面形	長さ	幅	深さ	重 複 関 係	掲載遺物	図	図版
郭	第3郭	隅 丸 長 方	[580]	1041	—		1～3	4	2・3
	第4郭	帯 状	[492]	1920	—			5	4
溝	SD1	直 線	[537]	163	43			4	
	SD2	楔 形	786	46	5			4	3
掘立柱建物	SB1	(長) 方	485	[59]	—			4	2・3

堅堀と考えられていたSD1については調査の結果、第3郭の埋土を切って掘削されていることが確認でき、また、堅堀としての機能を充足し得る構造を有していないことが判明したため、城郭施設とは関わりのない新しい時期のものと判断した。主要遺構については表2に一覧し、次章にて詳述する。また柱穴については表3に諸元を一覧した。

出土遺物は第3郭から土師器杯4点が出土したのみである。

通常、出土遺物はA～Cの3区分に分類して報告書刊行後に県教委へ移管するが、今回の報告書ではA・Bの2区分とした。各区分の分類基準を以下に示す。

A...報告書掲載遺物。

B...Aを除く遺物。

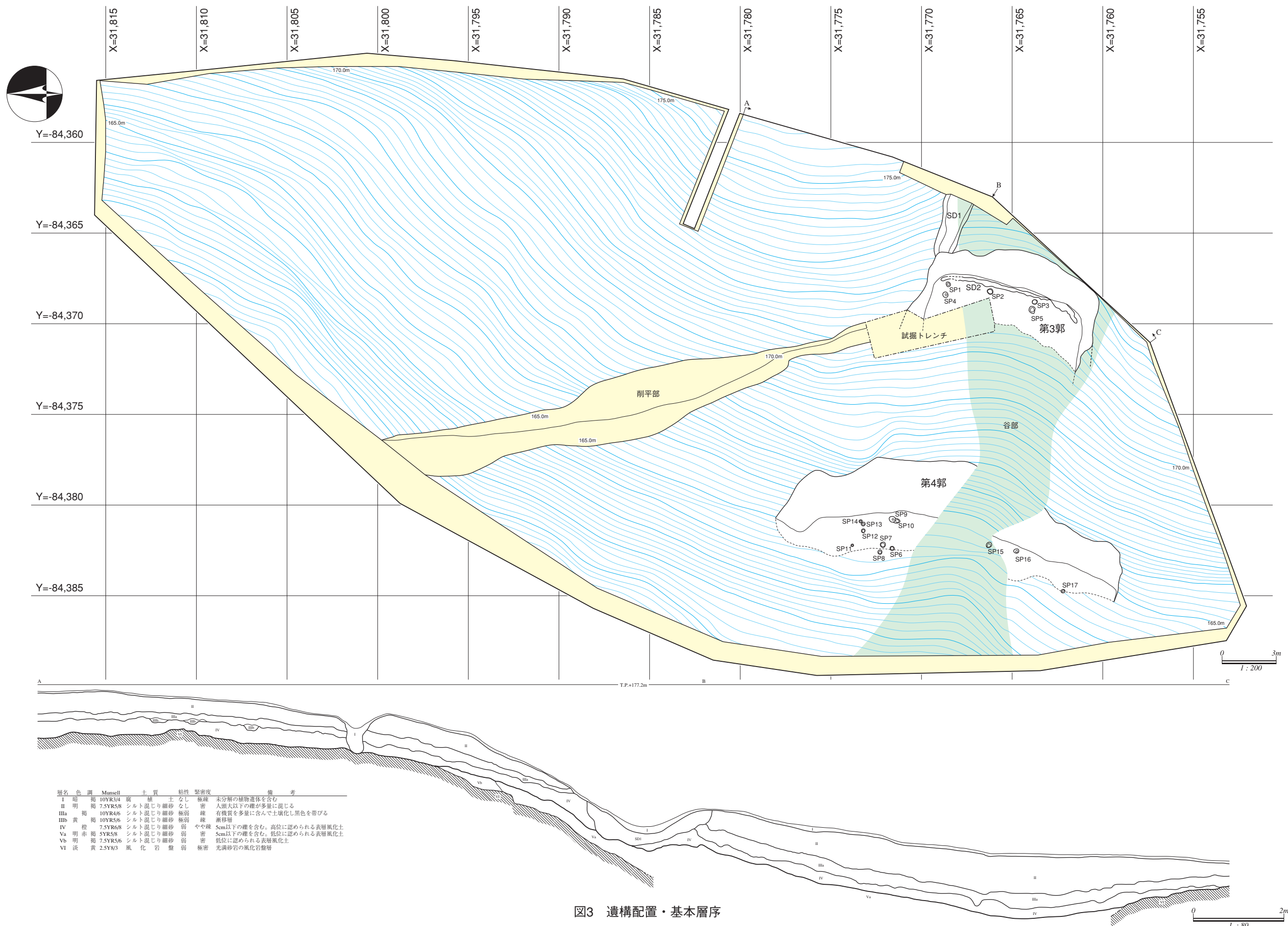


図3 遺構配置・基本層序

第4章 中世の遺構と遺物

第1節 第3郭(図4)

南北を尾根に挟まれた浅い谷部に構築される。南北の両翼は地山(VI層)である砂岩の風化岩盤を、中央部高位側は谷の堆積物を削り込んで、さらに中央部低位側は削った土砂(第12層)を押し出して平坦部を作り出す。平坦部の標高は170.5mである。低位側は盛土が流出して平坦面が遺存していない。平坦面遺存部の平面形は「コ」字形を呈するが、盛土の残存範囲と斜面の傾斜変換線から復元し得る平面形は長辺8.7m、短辺6.7m程度の長方形を呈していたものと考えられる。現存する平坦面の面積は約26.5m²であるが、本来は58m²程度であったものと考えられる。掘削法面の法肩間は南北長10.41mで、平坦面からの比高1.97mを測る。掘削角度は北側法面が74.5°と最も急勾配で、南側法面は51°、東側法面は北側で58°、南側で42°と南ほど勾配が緩やかとなる。

郭の埋土は4層に大別できる。第2層は土壌化が著しく黒色を帯びる層で、谷の低地にあって湿潤な環境下で有機質が蓄積されて形成された土層である。第3層は角礫を多量に含む層で下位ほど礫の含有量が増す。層厚90cmを測る分厚い堆積で、まんべんなく土壌化しているが、層の厚みから堆積後に土壌化したとは考えられず、土壌化した土砂を人為的に埋め戻したのと考えられる。第4層は角礫や炭化物が含まれ、わずかに土壌化する。廃絶後の流入土と考えられる。第5層は郭平坦面直上に堆積する。炭化物や礫に加え遺物を含む。床面直上で比較的大きな円礫ないしは半角礫が出土しているが、規則的な配列は認められない。円礫は持ち込まれた可能性が高いが、検出時にはすでに原位置から遊離していたものと考えられる。第5層下面がプライマリーな床面となるが、床面は黄褐色土と黒色土が斑状に入り交じり、固く締まって貼床状を呈する。

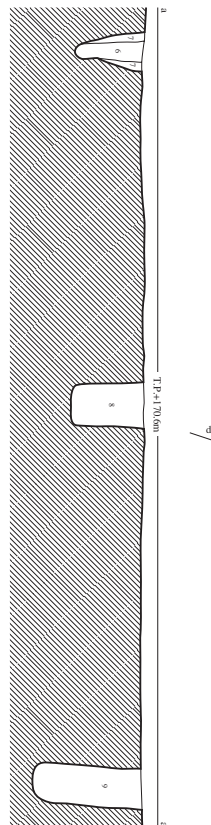
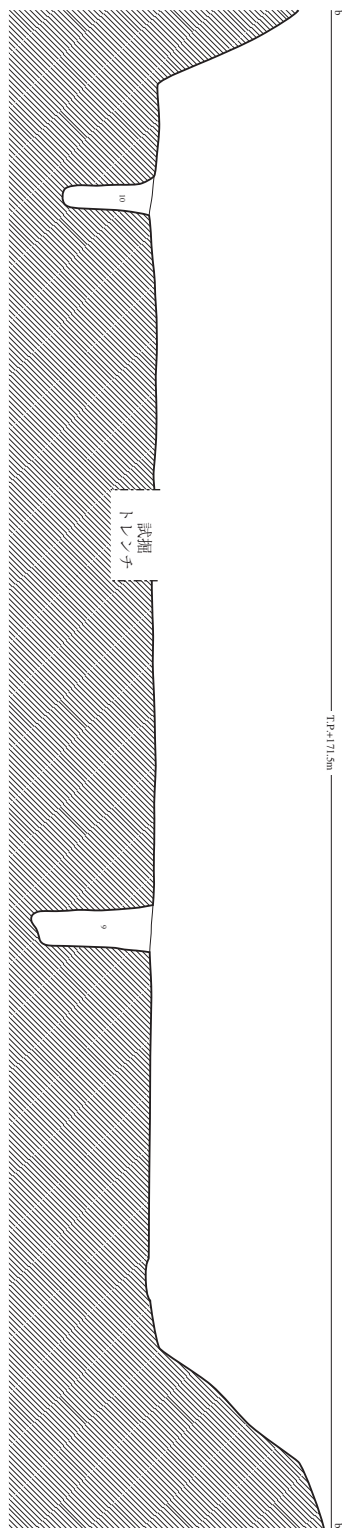
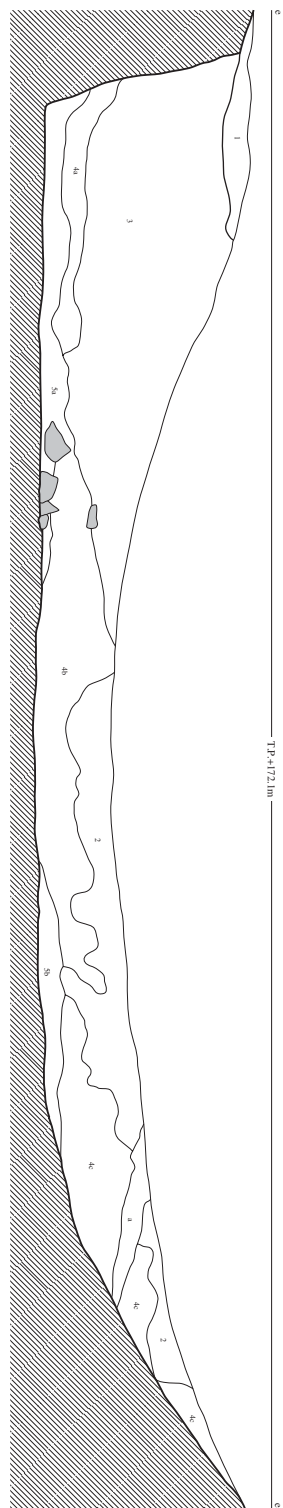
床面で掘立柱建物(SB1)と東側法面法尻に沿って浅い溝(SD2)が検出された。

1 掘立柱建物(図4)

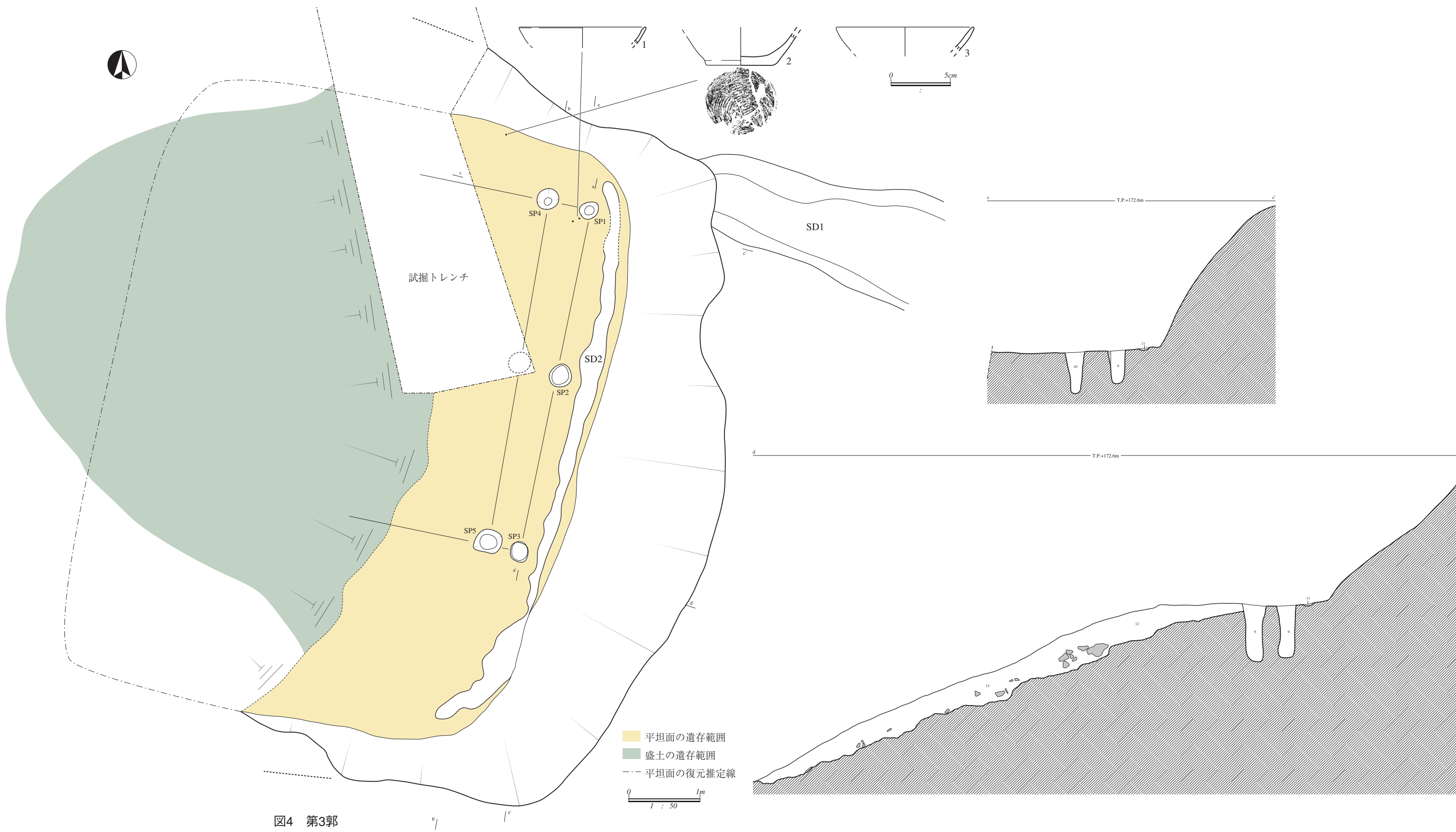
平坦面で掘立柱建物を検出した。検出した柱穴は5つ(SP1～5)である。検出した柱穴は桁行き2間分で、柱間は2.4m前後である。SP1～3は東側法面に沿って南北に並び、SP4・5はSP1～3の西約60cmに平行して並ぶ。SP2に対応する柱穴が検出されなかったが、試掘トレンチに切られているものと考えられる。この柱穴列間は60cmと狭いため東側の柱穴列は庇等に伴う柱穴列と考えられる。柱穴はいずれも47～79cmと深く、断面形は筒状を呈する。復元できる郭平坦面の広さから、本来2間×2間の建物であったものと推測できる。

2 溝(図4)

掘立柱建物と東側法面法尻の間で検出された。ほとんど掘方をもたないごく浅い窪みで、わずかにグライ化して灰色味を帯びたシルト混じり細砂が堆積する。掘立柱建物に伴う雨落ち溝と考えられる。



層名	色	調	Munsell	土質	粘性	堅密度	備考
a	暗	褐	10YR3/4	砂混じり粘土	弱	疎	拳大の礫が混じる。暗褐色土と黄褐色土が斑状を呈する。木根痕
1	明	黄	10YR6/8	シルト混じり細砂	極弱	やや疎	拳大の礫が混じる。SD1埋土
2		褐	7.5YR4/4	シルト混じり細砂	弱	疎	1cm大の礫が混じる。黄褐色土ブロックが斑点状に混じる。土壌化顕著
3		褐	7.5YR4/6	シルト混じり細砂	極弱	やや疎	拳大の礫が混じる。下位ほど礫が多く含まれる。土壌化する
4a		橙	7.5YR6/8	シルト混じり細砂	極弱	やや疎	わずかに土壌化する
4b	明	褐	7.5YR5/8	シルト混じり細砂	なし	密	拳大の礫が少量に混じる
4c	明	褐	7.5YR5/8	シルト混じり細砂	弱	やや疎	炭化物が混じる。わずかに土壌化する
5a	黄	橙	7.5YR7/8	シルト混じり細砂	弱	疎	黒色土ブロックが混じる。最下面に炭化物が混じる。遺物出土
5b	明	褐	7.5YR5/6	シルト混じり細砂	極弱	極密	拳大の礫が混じる。最下面に炭化物が混じる。わずかに土壌化する。
6	明	黄	10YR6/6	シルト混じり細砂	極弱	疎	柱痕
7	黄	橙	10YR8/6	シルト混じり細砂	極弱	密	掘方埋土
8	明	褐	7.5YR5/8	シルト混じり細砂	極弱	疎	
9		褐	7.5YR4/6	シルト混じり細砂	極弱	疎	礫が混じる
10		褐	7.5YR6/6	シルト混じり細砂	極弱	疎	
11	黄	褐	10YR5/8	シルト混じり細砂	中	疎	炭化物が混じる。わずかにグライ化して灰色を帯びる。SD2埋土
12	明	褐	7.5YR5/8	シルト混じり細砂	極弱	密	5cm～人頭大の角礫を含む。炭化物がごく少量混じる。わずかに土壌化し褐色を帯びる



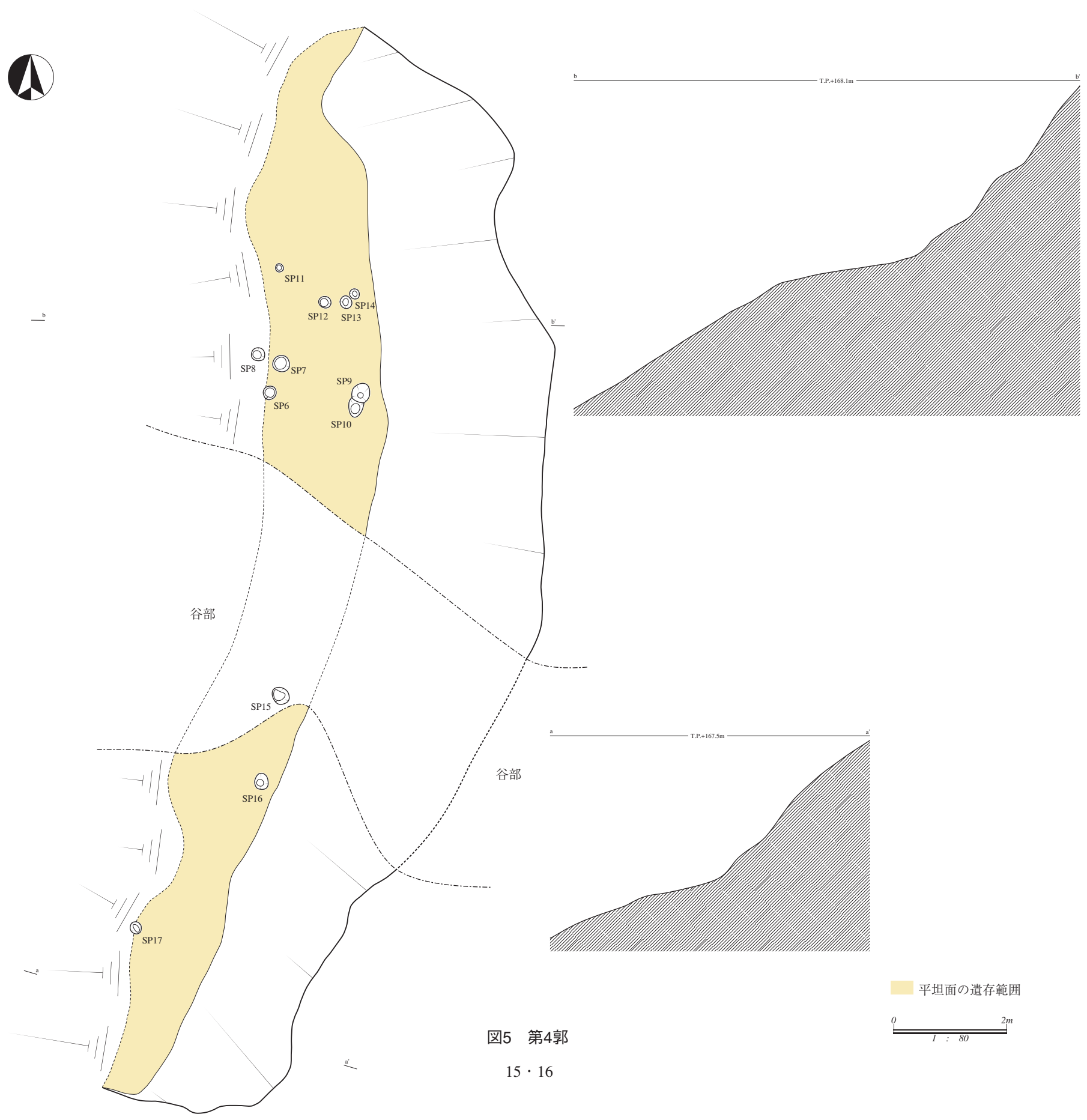


図5 第4郭

15・16

3 遺物(図4)

土師器杯が郭埋土の第3層から2点、第5層から2点出土した。このうち3点を図示したが、第3層中からの出土遺物(3)は第3層が廃城後の人為的な埋め土であることから、第3郭に伴う遺物とは考えられず、周辺に存在した遺構からの混入と考えられる。第5層からの出土遺物(1・2)は平坦面直上からの出土で、第3郭に伴うものと判断できる。

1～3は土師器杯である。口縁部が直線的に外傾して開く。1・3の口縁端部は尖り気味である。2の底部切り離しは回転糸切りである。いずれも胎土はにぶい黄橙色を呈する。

第2節 第4郭(図5)

標高164～167m付近の浅い谷部に地山(VI層)である砂岩の風化岩盤を削って平坦部を作り出す。平坦面遺存部の平面形は南北に細長い帯状を呈するが、谷中央部は流出して遺存していない。残存する平坦面は幅19.2m、長さ2.0m、面積は約38m²である。掘削法面法肩は平坦面からの比高3.0mを測る。掘削角度は約45°である。平坦面から柱穴12(SP6～17)が検出された。いずれも断面形は筒状を呈し、埋土は明褐色を呈するシルト混じり細砂である。特に規則的な配列等は認められなかった。遺物は出土していない。

表3 柱穴一覧

単位:cm (*):復元値 [*]:残存値 →**:**を切る,←**:**に切られる

遺構名	平面形	検出面埋土色調	土質	長径	短径	深さ	重複関係	備考	図	図版
SP1	円	明黄褐(10YR6/6) 黄橙(10YR8/6)	B C	25.0	—	47.0		第3郭SB1	4	2,3
SP2	円	明褐(7.5YR5/8)	B	30.0	—	48.0		第3郭SB1	4	2,3
SP3	円	褐(7.5YR4/6)	B	28.0	—	73.0		第3郭SB1	4	2,3
SP4	円	橙(7.5YR6/6)	B	27.0	—	60.0		第3郭SB1	4	2,3
SP5	円	褐(7.5YR4/6)	B	31.0	—	79.0		第3郭SB1	4	2,3
SP6	円	明褐(7.5YR5/8)	A	22.0	—	50.0		第4郭・炭化物	5	4
SP7	円	明褐(7.5YR5/8)	A	28.0	—	34.0		第4郭・炭化物	5	4
SP8	円	明褐(7.5YR5/8)	A	22.0	—	20.0		第4郭・炭化物	5	4
SP9	円	明褐(7.5YR5/8)	A	30.0	—	48.0		第4郭・炭化物	5	4
SP10	円	明褐(7.5YR5/8)	A	25.0	—	47.0		第4郭・炭化物	5	4
SP11	円	明褐(7.5YR5/8)	A	14.0	—	15.0		第4郭・炭化物	5	4
SP12	円	明褐(7.5YR5/8)	A	20.0	—	33.0		第4郭・炭化物	5	4
SP13	円	明褐(7.5YR5/8)	A	19.0	—	16.0		第4郭・炭化物	5	4
SP14	円	明褐(7.5YR5/8)	A	16.0	—	12.0		第4郭・炭化物	5	4
SP15	楕円	明褐(7.5YR5/8)	A	31.0	25.0	38.0		第4郭・炭化物	5	4
SP16	楕円	明褐(7.5YR5/8)	A	23.0	18.0	34.0		第4郭・炭化物	5	4
SP17	円	明褐(7.5YR5/8)	A	15.0	—	54.0		第4郭・炭化物	5	4

A:シルト混じり細砂・粘性:極弱・緊密度:やや疎・炭化物を含み黄褐色土ブロックが少量混じる
 B:シルト混じり細砂・粘性:極弱・緊密度:疎・礫が少量混じる
 C:シルト混じり細砂・粘性:極弱・緊密度:密・土壌化せず無機質

表4 掲載遺物一覧

番号	種別	器 種	出土情報	法 量	外面色調 内面色調	調 整	備 考	図	図版
1	土師器	杯	第3郭	TR(10.4)	5YR7/6 5YR7/6	o:ナデ i:ナデ		4	6
2	土師器	杯	第3郭	LR5.5	5YR7/6 5YR7/6	o:ナデ i:ナデ	回転糸切り	4	6
3	土師器	杯	第3郭	TR(11.0)	5YR7/6 5YR7/6	o:ナデ i:ナデ		4	6

表5 出土遺物一覧

時期	出土情報	種 別	部 位	器 種	区分	点数	掲載番号
中世	第3郭	土師器	口縁部	杯	A	2	1,3
			底部	杯	A	1	2
			胴部	杯	B	1	

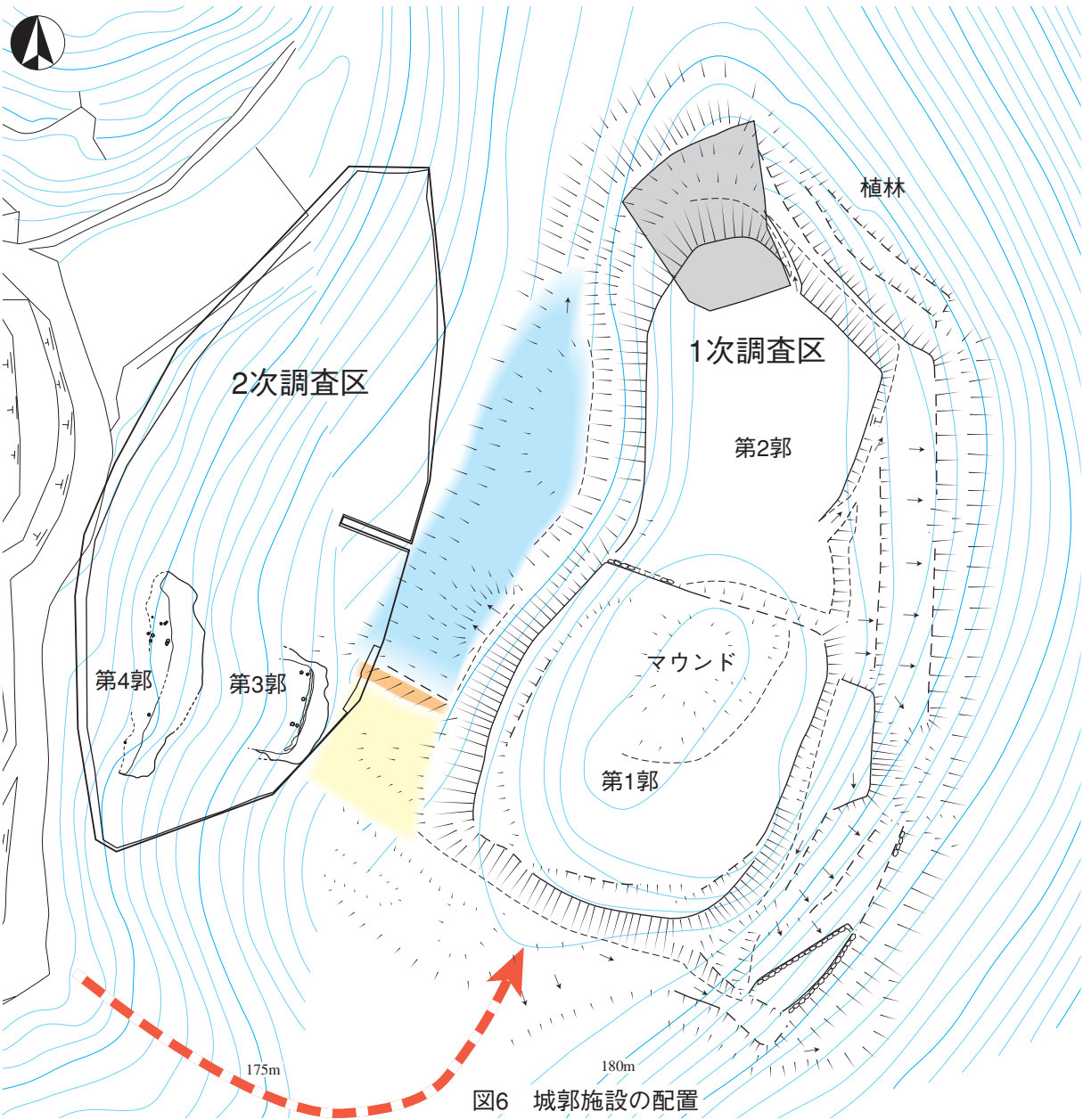


図6 城郭施設の配置

第5章 まとめ(図6)

前回の1次調査では第2郭の北端部を、今回は城の西斜面のほぼ全面を調査した。調査の結果、西斜面の谷部に小規模な郭2面(第3・4郭)の存在が確認され、また、調査前に豎堀と予測されていた溝状の窪みは豎堀ではないことが判明し、西斜面には郭2面以外に遺構は存在していないことが明らかとなった。第3・4郭は往時の状況を復元すると、西斜面のなかでは比較的傾斜の緩やかな谷部に階段状に設けられた郭であり、互いに関連した施設であると判断できる。一方、城の中心施設である第1・2郭に対しては西方へ突出していて、第1・2郭と第3郭の間に明確な城郭施設を看取することはできず、空間的な連続性を欠いている。

第3郭は地山を掘削し、その掘削残土を斜面下方に押し出して平坦面を造り出し、平坦面には掘立柱建物を建てる。平坦面からは土師器杯が出土し、その時期は概ね15世紀後半から16世紀前半と考えられるが、陶磁器等が出土していないこともあって第3郭の詳細な時期を比定することは難しい。第3郭は調査前には完全に埋没していて、地表面観察でその存在を予測することが不可能な状況であった。第3郭を覆う土砂は4層に大別できるが(図4)、第3層の状況は特異である。第3層は破碎礫である角礫を多量に含んだ層で、層厚90cmに達する分厚い堆積であるにもかかわらず、下位に礫が多いほかはほとんど均質で細分化できない。こうした状況は第3郭が人為的に埋め戻された可能性を示唆する。また、第3層中にはごく少量ながら土師器杯の破片が含まれていた。埋め戻し土中に遺物が含まれるという事象は、埋め戻しの時点で近辺に存在していたであろう遺構を破壊して生じた土砂を埋め戻しに供したとの理解を促す。低い場所の土砂をわざわざ高い場所へ運ぶことは常識的にはあり得ないので、埋め戻し土は第3郭より高い場所に存在していたものであり、第3郭の高位側に郭が存在していた可能性が考えられる。また、この郭が存在していたと考えられる箇所(図6黄色部分)とその北側(図6水色部分)の間に設けられた比高1～1.5mの段(図6橙色部分)も、郭の存在を裏付けている。埋め戻し時期については確たる根拠はないが、現況は雑木林であり、開墾して畑地として利用した痕跡などもないことから、廃城後、植林や耕作などといった土地利用のために埋め戻した可能性は極めて低いものと考えられる。

調査に先立って縄張り調査を実施しているが、発掘調査の成果も合わせて考えると、角ヶ谷城には次のような構造上の特徴がある。

第2郭の北端部(1次調査区)は郭から北へ向かって突出する構造で、この突出部は地山を整形した上、版築状の盛土を施すなどして、見張台などの施設が存在した可能性が高い(片岡・藤本 2006)。また、城の東面には2段の帯郭を設けるなど、北および東面の防御施設は堅固である。

これに対し、城の西および南面には第1・2郭の切岸以外の明確な防御施設をもたない。城への侵攻は第1郭の南にある沢から(図6赤色破線)が最も容易と考えられるにもかかわらず、切岸以外の防御施設をもたないことは、南からの侵攻を想定していないか、あるいは侵攻されたとしても切岸で十分防御可能と考えていたかのいずれかである。いずれにしても、第1・2郭南西面の防御は切岸をもって完結していることから、城内空間として認識されていたのは第1・2郭のみと考えることができる。したがって、第1・2郭の西に存在する不明瞭な平坦面ないし緩斜面(図6黄色・

水色部分)は、切岸を造った際に生じた掘削残土を押し出した結果副次的に形成されたもので、第1・2郭と連動して機能する意図的に造営した城郭施設とは考えられない。今回の調査で確認した基本層序Ⅱ層(図3)および第3郭第3層(図4)は、こうした掘削残土に相当するものと考えられる。

このように、現存する角ヶ谷城が第1・2郭のみを城内空間とする構造であると仮定するならば、今回検出した第3・4郭は城外に位置していることになる。両者の規模には著しい隔たりがあり、相互に構造的な類似性や機能・空間的な連続性も見てとれないことから、両者が一連の城郭施設であった可能性は極めて低い。かつ、第3・4郭が第1・2郭の切岸掘削残土で埋め戻されているとすれば、第3・4郭は第1・2郭に先行する段階のものと位置づけることができる。つまり、第1・2郭を現存形態に構築する時点で、新たな城郭構想において第3・4郭は不必要なものと判断し、放棄したものと考えられるのである。

現段階では第1・2郭の発掘調査が行われていないことや、各遺構ごとの詳細な時期検討ができないなどの課題が残るため仮説の域を出るものではないが、15世紀の後半を遡らない時期にはすでに古い段階の角ヶ谷城が存在し、その後、山腹の郭を放棄して山頂に防御機能を集約し、切岸防御を主体とする新しい段階の城郭に造り替えたと考えられるのである。(眞鍋)

参考文献

片岡大介・藤本清志 2006『角ヶ谷城跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター



版

凡 例

1. 遺物写真の縮率は、約1/3である。
2. 航空写真以外の遺構写真・遺物写真は真鍋が撮影した。



上空から見た角ヶ谷城跡周辺(東より)



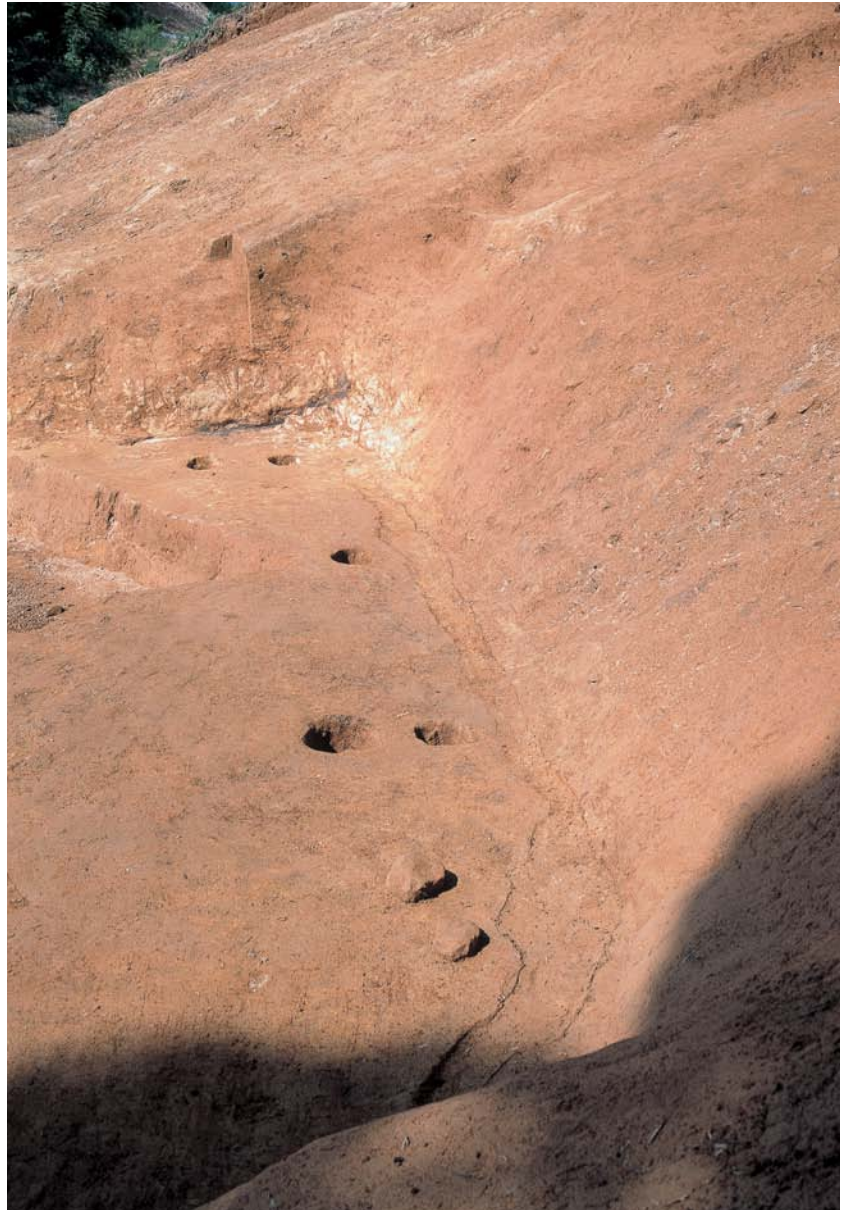
基本層序(東壁土層堆積状況)



第3郭土層堆積状況(北西より)



第3郭(北より)



第3郭(南より)



遺物(1)出土状況



遺物(2)出土状況



第4郭(北より)



完掘状況(南西より)



完掘状況(西より)



第3郭盛土断ち割り断面(北東より)



1



2



3



報告書抄録

ふ り が な	かくがたにじょうあとにじ							
書 名	角ヶ谷城跡2次							
副 書 名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書IV							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	埋蔵文化財発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 番号	第135集							
編 著 者 名	眞鍋昭文							
編 集 機 関	財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター							
所 在 地	〒 791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68番地1 TEL (089) 911-0502							
発 行 年 月 日	西暦 2006年 10月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° , ' , ''	東 経 ° , ' , ''	調査期間	調査面積 <i>m</i> ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かくがたにじょうあと 角ヶ谷城跡	えひめけんう わ じ ま し 愛媛県宇和島市 みまちょうそね 三間町曾根	38203		33°16'49"	132°35'50"	20060710 ＼ 20060831	880	四国横断自 動車道建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
角ヶ谷城跡	城館跡	中世	郭 掘建柱建物		土師器		新旧2時期の城郭施設が 存在していた可能性が 考えられる。新しい段 階では斜面に存在して いた郭を放棄し、山頂 の2段の郭に集約したと 考えられる。	

埋蔵文化財発掘調査報告書 第135集

角ヶ谷城跡 2次
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年10月

編集・発行 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
愛媛県松山市衣山四丁目68番地1
TEL (089) 911-0502

印刷 アマノ印刷株式会社

